

## 御岳・王滝川東股～中股下降

--- 御岳の美渓を探る ---

(2006年8月の記録)

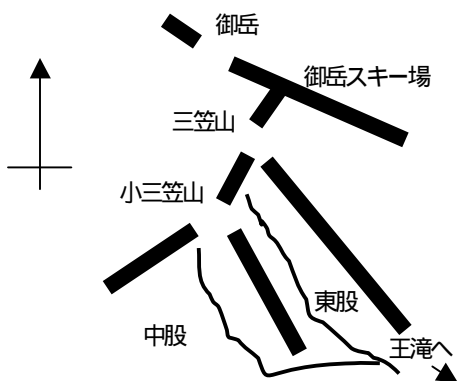
彷徨倶楽部  
秋田 誠

日程：2006年8月19日(土)夜～20日(日)

参加者：秋田誠、小倉保久(福島労山)

8月20日(日)晴

林道ゲート(車デポ) 6:50 --- 三沢橋(入渓点、標高1,370メートル) 7:50 --- 大滝(3段25メートル)上 8:30 --- 二股(標高1,590メートル) 9:35～9:40 --- ハング滝(25メートル)下 10:25～10:35 --- ハング滝(25メートル)上 11:10 --- 奥ノ二股(標高1,880メートル) 11:25～11:35 --- 小三笠山の肩(標高1,950メートル) 12:40～12:50 --- 中股沢床 13:15 --- 中股出合 14:50 --- 東股出合 15:10 --- 林道ゲート(車デポ) 15:50



地形図で想像したよりも王滝村の村中の道は遥かに細く入り組んでいた。小倉君が予めカーナビに目標を入力していなかったら、初見参の我々は道に迷い無為な時間を費やすことになっただろう。アプローチを甘くみた私は、沢の拡大地形図しか持参しなかったのだ。大反省である。

鈴ヶ沢に沿って良く路面の整備された林道を小1時間黙々と歩いた。一旦左岸に渡った林道が再び三沢橋で流れを渡り返すところが入渓点だった。私たちは

橋のたもとから踏跡に従って沢床に降り立った。記録によれば、鈴ヶ沢東股は御岳随一の美渓らしい。空を仰ぐと多少雲は浮かんでいたが天気は上々だった。どこか秋を思わせる空模様だ。この分なら夕立の心配はあるまい。これから始る未知らぬ沢の旅に期待が膨らんだ。ありふれた倒木が散在する空の開けたゴーロをしばらく歩くと、両岸は狭まりコンクリートに小石を混ぜて固めたような沢床が現れた。御岳が噴火した折に流れ下った溶岩が冷えて固まったものか？滑の美しい沢と聞いていたので、あれね、このコンクリート床が続くようでは敵わんなあと思った。しかし、間もなく沢床は磨かれた岩床に変わり心配は杞憂に終わった。

水遊びに興ずる幼な子のように浅い流れをかき乱しつつ遡ると、正面に岩壁を断ち割るような大滝(3段25メートル)が水量豊かに落ちていた。上段は豪快な直瀑(15メートル)、小ぶりの中段(3メートル)を挟んで下段(7メートル)は美しい幅広の滝である。なかなか見応えのある滝だ。遡行を始めてまだ20分ほどであった。昨夜、高速道路のサービスエリアでの仮眠の前に食べた豚肉が合わなかったのか、腹の調子が最悪となった私が岩陰で用を足して滝の基部まで来ると、すでに小倉君は右岸の湿った草付から下段の滝の小広い落ち口に立ち、上部へ抜けるルートを探っていた。滝の両岸は部分的にハングした垂壁で、一見して結論は高巻きだ。右岸の急な脆い泥壁に微かな踏跡を拾って、落ち口のやや上部の灌木帯まで巻き上がり、ちょうど良い具合に生えた木の枝を手懸かりにして沢に戻った。落差があり不安定なこの高巻きでは、不



大滝(3段25m)

用意にスリップでもすれば致命的であろう。

大滝の上流で沢は広い釜を持つ4メートル滝を境に、流れの向きを北東に変えた。バランスを要する滝の右壁を攀ると、連続する滝場の始まりだった。8メートル前後の滑滝群、磨かれたゴルジュの中を一気に流れ落ちる長さ30メートルほどもありそうな豪快なトイ状の滝、穏やかな陽射しを全身に浴びてしばらく寝転がっていたくなるような平滑、上の淵からの流れが岩の下を流れて流れ込んでいるはずなのに水面は鏡のように静まり返り波ひとつなく、あたかも上の淵の流れは総て地中深く吸い込まれているかのように見える奇妙な淵など、次から次に現れる自然の造形の妙に遡行は飽きることなく、私たちはすこぶる愉快に高度を稼いだ。



美しい小滝の出迎え

美しい斜瀑(10メートル)に誘われるように二股を右に入ると、左岸の上部に顕著な洞穴を見た。すだれ状に水を落とすバルコニーのような形状の滝を右手から越すと、沢は倒木とゴーロが目立つようになった。やがて、「ここで沢は行き止まり」と宣言するかのよう、ハングした半円状の壁が眼前に立ちはだかった。地形図にも記されている奥の大滝に着いたのだ。落差25メートルの滝は全く乾き切って落水がない。辺りはこれまでとがらりと一変して、荒涼とした溪相に変わった。私たちは左岸に屹立している脆そうな壁の切れ目に向かって灌木を分けて登った。壁の基部まで登ると、滝の直下のガレから壁に沿って斜上する明瞭な踏跡に合流した。壁の基部に落ちていたと云って、小倉君が壊れたデジタルカメラを見せてくれた。誰が落としたものか？ 液晶材料の毒性は非常に強いと聞いていたので、こんな所に放置するなんてとんでもないと思った。小倉君がこの有害ゴミを回収したのは勿論である。

5メートルの岩溝を伝って一段上の灌木帯まで登ると、小尾根の上部をさらに高巻くルートと基部を下り気味に落ち口へ向かってトラバースするルートが読めた。トラバースではまだ落口の高さに届かないのではないかと思ったが、小さく巻いて落口近くに出ようという小倉君の意見に従った。灌木と笹を手がかりにトラバースすると、藪越しに落ち口を見通せるところに出たが、ボロボロの3メートルの段差が進路を阻んでいた。落口へは更に5メートルほど登らなければならない。壁には太い灌木が根を張り充分体重を支えてくれそうだった。ショルダーで小倉君に先行してもらい、私はザックを引き上げてもらった後、アプミを使って灌木の幹に乗り移った。灌木の上に立てば落口までは容易だった。効率の良い高巻きだったので、私達は寸分違わず滝の落口に立つことが出来た。大滝の上流で水は途絶え、夕立の名残りなのかあちこちに水溜りが散見されるばかりだった。しばらく沢沿いに進み、小さな二股から中股への下降点を求めて右岸の緩やかな熊笹の尾根に分け入った。小さな二股を右に進めば三笠山方面の林道に出られると思われた。

ひたすら密生する熊笹を分け進んだ。時折現れる先蹤者の痕跡もたちまち熊笹の海に飲まれてしまう。私たちはともすれば自らの位置を見失いそうだった。浅い沢を2本越すと、小三笠山から続く疎らに灌木の生えた瓦礫の尾根が目の前にあった。あまたの可憐なタカネヤマハハコが足の置き場もないくらいに群生する源頭部を迂回して小三笠山に近づくと、再び尾根の藪は濃くなり、幾重もの朽ちかけた倒木のバリケードが私たちの前進を妨げた。

中股を下り始めた直後、50メートル下流で藪の中をガサガサ音を立てて移動する動物の気配があった。一瞬、熊か？ と小倉君と見合わせた。15分ほど様子を窺ったが向こうも動きを止め、差し迫った危険はなさそうだった。私たちは下降を再開した。結局、はち合わせすることはなかったが、一体何だったのだろうか？ 中股は褐色の滑が続き快適な下降に終始した。ザックに忍ばせた缶ビールを口実に大休止したが、それでも2時間余りで出合まで下ることが出来た。